

# チュ・ユアンの非道

(1)  
マルタ・ブランコ  
三角 明子 訳

チュ・ユアンという優れた詩人がおりました。ごろつきで宿なし、そして四六時中酔っぱらっておりましたが、皇帝はチュ・ユアンを誰よりも好んで、傍かたわらに置こうとし、午後になり宮廷のおべっかに飽きると国中の道を探させたのですが、いざチュ・ユアンが来るとなると、黄金の大広間に足を踏み入れるよりはるかに前に、臭いでそれがわかるのでした。

「その襪はくを脱げ、臭い」そのたび皇帝は声をあげました。

チュ・ユアンはお辞儀のなりそこないのような身振りをしましたが、身に着けているものをけっして脱だごうとはしませんでした。

「偉大なるお方、わたしはこの襪はくを着ているほうがましに見えますよ。裸のわたしはお嫌でしょう、それは醜みにくいですから」

「ホルムズの真珠と鳴り響く滝の国から来た青い石を縫い留めた、絹のケープをやろう。百万匹の蚕が吐いた糸だぞ。二百人の女奴隷がその糸を機はたにかけ、縫い上げ、刺繡を施したのだ」

「それではチュ・ユアンはもうチュ・ユアンではなくなってしまうでしょう」

「口に気をつけよ、思い上がり者め。そちだけだ、この余に向かつて横柄な口をきこうとする者は」

「そうさせてくださることでわたしを称えてらっしゃるのですね、偉大なる御方よ」

「それでもそちは、余のため着替え変えようとはしないのだな、この恥知らずが」

「天子さま、わたしはあなたさまのしもべという特権を失いたくないのですよ。たとえあなたさまを置いていかざるを得なくなろうと。あなたさまの皇宮には、穏やかな酩酊めいていに慣れきった詩人の渴あせきを満たしてくれる飲み物がないのです」

皇帝は米の蒸留酒を持ってこさせると、高官たちや大領主たちを下がらせ、漆塗りの高い扉を閉じさせるのでした。外に出された者たちは扉の隙間に鼻を押しつけ、赤い陶器の床にこぼれた蒸留酒の苦く濃厚な香りを嗅ぐのです。嗅いだような気がしたかもしれませんが、そして磨き

あげた木材できた扉の向こうから聞こえる、異様な音や、歎きの声や、ため息に耳をすませたのでした、聞こえたと思ったただけかもしれませんが。

そんな気配がしたのは、皇帝が泣いていたからでした。

「チュ・ユアン、そちの首を刎ねねばならぬ」

「刎ねるように命じる、とおっしゃりたかったのでしょうか。偉大なるあなたさまは首の刎ね方がおわかりにないでしょうか」

「結果は同じだろう」

「あなたさまには違いますね、天子さま。恐れなくていい唯一の者を亡くされるんですから」

「偉大なる真実である」と皇帝は返しました。「では、完璧な詩を詠め」

「存在しないか、わたしがまだ見つけておりません。探しに出て、いつか出くわしたら、チークか象牙の箱に入れてお持ちしましょう」

皇帝は声をあげて笑いました。

「チュ・ユアン、余の宮廷にずっとおれ」皇帝は懸命に頼みました。「へつらいばかりで退屈なのだ。やがて退屈で息が詰まって死んでしまう。鷹狩りですら、もう、おのれが何者なのか忘れさせてくれないのだ」

「偉大なるお方よ、わたしはけつして道を捨てはしません。水が解けかけた川を渡る途中で水に尾をひたす狐は、虫けらのように溺れ死にます。さまようことがわたしの特権なのです。あなたさまは余るほどにお持ちではないですか」

「では踊ろうぞ、チュ・ユアン。風にそよぐ柳の枝のように腕を動かすやり方を教えてくれ」

皇帝の手に触れたことが一度もない高官や大領主たちは、頬の内側を噛み、象牙や黒檀の爪を繊細なてのひらに食いこませて、いらつき混乱しながら音楽を聴くのでした、皇帝が悪臭を放つ物乞いと踊り、その物乞いが笑い声をたて、酒を飲み、天の子である皇帝を、風に運ばれるマルハナバチのようにターンさせていたのです。

「なにゆえ、そちは詩人なのだ」息を弾ませながら皇帝が訊きました。

「なにゆえ、あなたさまは皇帝なのですか」チュ・ユアンは乱れない声で訊きました。

「答えない返事をするでない！ そちは馬糞から生まれた惨めな輩で、父の名をだれも知らず、詩がなんたるかも知らないではないか！」

「わたしが馬の作り方を知らなくても、馬の乗り方がわからないとは限りません」明け方、チュ・ユアンはこう答えます。

「おまえはさすらいものであるから、せめてわが南の国ぐにがどうなっているかを申せ」

「わたしは北から参りました」

「では北の国ぐにがどのような様子か申せ」

「素晴らしき天子さま、南と変わりはありません。ただ、カバノキはとても美しく、黄河の黄色きこと神のごとです」

「黄色い神はおらぬ、チュ・ユアン」

「黄色い神はおらぬ」チュ・ユアンは同じことばをいいました。

「百人隊が千隊、わたしの命に従おうと控えているのだぞ！ そちの首を刎ねることができるとだぞ！」

「そちの首を刎ねることができるとだぞ！」いたずらっぽい声音で真似るチュ・ユアンは、もとのものも着せられたものもみんな脱いでしまいい、まっぴりだかでも皇宮でもどこでも踊るのでした。

「そちは酔っているのだ、だから赦す」偉大なる皇帝は、詩人のかたわらに重い体を横たえながらいいました。「なにがわかつているのか、チュ・ユアン、余が馬鹿者のように感じるようにしむけることを」

「十万の文字を百倍知っておりますよ。来る日も来る日も、また夜毎にも、文字を書いております。宮殿に閉じこもったひとびとが世界を知り、世界を愛するようにしてやれるのです」

「そちが世界と呼ぶものとやらは、どんな様子なのだろう」皇帝はため息を漏らしました。

「世界は一匹の亀で、わたしはその上を歩いているのです」チュ・ユアンはいいました。

「チュ・ユアン、人間の中身を見たことがあるか、戦が終わる、腸はらわたをさらけ出して芥子の花咲く野に横たわっているありさまを」

「数多あまたの戦のあと、中身も破壊しつくされた者を多く見てきましたよ。ですがあなたさまは決してそんな戦いをすることはありません」

「もう行け、チュ・ユアン、完璧な詩を持って春に来るがいい」

皇帝は右手を気だるげに持ち上げて合図し、チュ・ユアンに別れを告げました。重たい臉が皇帝の天空の瞳をふさいでいきました。

そしてチュ・ユアンは、ふらつき躓つまずきながら黄金の間を去る道すがら、檻樓のような衣服を捨てていきました。

高官たちに羨みの眼を注がれながら、チュ・ユアンは七宝焼きを敷き詰めた廊下や、砂を引いたいくつもの庭を横切つて、皇宮の部屋をつぎつぎに抜けていきました。眠たげな農民の足取りで、厩のような臭いを放ち、乱れ髪で、盗人の笑みを浮かべたこの酔っぱらった詩人は、高官たちに屈辱を与えていたのでした。

チュ・ユアンにもつとも敵意を抱いている者たちは、お辞儀ともいえないお辞儀をしながら廊下や庭を通っていく詩人を、それでも命を取らず

に通してやります。それは、その朝、皇帝は大きな笑みを浮かべていらっしやるだろうから。皇帝に異をとなえる者の舌も、キジの羽も、盗人の両手も、皇室に仕える予定の男児たちの睾丸を切れともおっしゃらないだろうからなのです。

皇宮では、チュ・ユアンの非道が、皇帝が周期的にくだす命令を中断させることがありました。奴隷たちも大領主たちも命じられるままに行っていました。あんな下品な姿の男が、どのようにして世界の主の心を動かしているのかはわかりませんでした。

「このチュ・ユアンは偉大な詩人だ」あるとき、皇帝が奴隷たちにいいました。奴隷たちは染みのついた長衣を脱がせようとしておりました。

「ならず者でございます」その場を下がる前に、宰相がもごもごいいました。「主上、どうぞお耳をお貸しください。あのチュ・ユアンめはその手で女を殺めたというのに、水辺に寝転がり、雲を眺めているのです」

「余が生きていることに飽いている間、あれは笑い声をたて涙を流し酒を飲んでいる、そしていまそちは余に、あれが女を殺したというのに、水辺に寝転がり雲を眺めているという。そのように生きるとはどのようなものだろう、気が向くままになんでも自由にできるといふのは」

しかしその声を聴く宰相はもうおりませんでしたし、宦官はなにひとつ答えることはできませんでした。禁城の皇帝の私室には、去勢のうえ舌を切られた者しか仕えておりませんでした。

これはみな、世界が六分割された孔雀石の亀に過ぎなかったころのお話で、知るべきひとはみな知っていたこと、中国の国々にはなにもかもが変わることなく、詩人たちは千年も前から、米でつくった紙にそう書いていたのです。

(i) チリの作家マルタ・ブランコ (Marta Blanco, 1938-2020) の短編小説 "Iniquidades de Chu Yuan" の邦訳である。底本として *Para la mano izquierda* (Caos Ediciones, 1990) を使用し、二十世紀チリ短篇小説の傑作アンソロジー Marx Camilo (ed.) *Grandes Cuentos Chilenos del Siglo XX* (Random House Chile, 2005) を参照した。